

東洋におけるプロテスタント伝道と印刷

——美華書館（アメリカ長老会印刷所）を中心に——

宮坂 弥代生



はじめに

印刷技術発祥の地といわれる中国では、グーテンベルクが金属活字で『四十二行聖書』を印刷するより前に活字を發明していたが、一九世紀までは主に、版木（文字を彫った板）を用いて印刷する木版印刷で書物の印刷を行っていた。朝鮮半島では銅活字による印刷も行われていたが、産業として発展するまでには至らず、日本でもイエズス会宣教師が西洋の印刷技術を導入し、いわゆる「きりしたん版」の印刷を行ったものの、技術は定着しなかった。

これらの国々で金属活字による近代的な活版印刷が行われるようになったのは、一九世紀になってからである。そ

の技術導入には、プロテスタント宣教師が布教する土地の言葉に翻訳した『聖書』や布教に必要な書物を印刷するために、中国に開設した印刷所が大きな役割を果たした。プロテスタント宣教師が文書伝道を重視したことはよく知られており、東アジア地域は宣教師が出版した書物を通じて、キリスト教のみならず欧米の学問・文化を摂取したが、同時にそれらの書物を印刷するための技術も受容したのである。印刷史研究の中で宣教師の開設した印刷所は「ミッション・プレス」(Mission Press) と呼ばれ、近年少しずつ研究が進んでいる。

本稿は、近代中国におけるプロテスタント宣教師の印刷・出版活動の研究が、印刷史研究者によってどのように行われているのかをまず跡づけ、次いでミッション・プレ

スの中でも特に、アメリカ長老会の宣教師によって中国に開設され、日中両国の印刷・出版業に大きな影響を与えた美華書館 (American Presbyterian Mission Press) に関して、新出史料に基づいて新たな知見を加えるものである。

一 在華ミッシン・プレス開設の歴史と印刷史研究

初めに、プロテスタント宣教師の中国伝道に伴う出版活動と、それらに関する近年の研究動向について簡単にまとめておきたい。

一八世紀末から一九世紀初頭にかけて中国伝道を志した宣教師たちは、当時はまだ中国入国が難しかったため伝道の足がかりとして、東アジア各地で中国語の習得に励みながら『聖書』を中国語に翻訳し、その成果を出版しようと考えた。

しかし、文字の数が数十文字のヨーロッパ言語に比べ、中国語は何千何万という文字 (漢字) を持つ言語である。日常的に使われる文字だけでも千は下らず、多くの字母を揃えなければ書物の出版は不可能である。その上、漢字は筆画も多く複雑な形をしているため、漢字活字の製作には、相当の準備と初期投資が必要であった。宣教師たちは当初、中国の伝統的な印刷技術である木版印刷も併用しな

がら、セランポールのバプティスト派の印刷所 (Serampore Mission Press)、澳門の東インド会社の印刷所 (The Honorable East India Company's Press)、ロンドン伝道会がマラッカに開設した英華書院の印刷所 (Anglo-Chinese Press) などで中国語書籍の出版を行った。以上のようなヨーロッパ人による漢字活字の研究と開発については、鈴木広光「ヨーロッパ人による漢字活字の開発 その歴史と背景」に詳しい。

宣教師が中国入国を許されるのは、一八四二年の南京条約締結後であるが、宣教師の密かな入国や伝道活動はすでにその前から行われていた。例えば、アメリカ海外伝道会の開設したアメリカ伝道会書館 (American Board of Commissioners for Foreign Mission Press) は一八三〇年代前半からすでに広州で出版活動を行っている。しかしミッシン・プレスが相次いで開設されるようになるのは、外人への内地開放とキリスト教布教の自由が認められた北京条約 (一八六〇年) 締結以降である。いつどこで誰が印刷所を開設し、どのような出版物を印刷していたかを知るためには、葉再生「現代印刷出版技術的伝入与早期的基督教出版社」、『中国印刷近代史 初稿』第三章「近代印刷術的伝入与発展」が有用である。在華ミッシン・プレスの活動が網羅的にまとめられており、全体像を把握することができる。

すでにこのような研究があることからわかるように、清末以降、近代的な活版印刷技術は、キリスト教宣教師とミッション・プレスによってもたらされた」という評価は、中国の印刷史研究者の間に定着している。宣教師や印刷所を個別に取り上げた研究としては、何凱立『基督教在华出版事業（一九一二—一九四九）』、蘇精『馬禮遜与中文印刷出版』などがある。前者は、広学会（Christian Literature Society for China）・青年協会書局（Association Press）の活動と、欧米各国の聖書協会が中国で行った出版事業について考察したもので、後者は、ロバート・モリソン（Robert Morrison）の出版活動に焦点を当てた研究である。

日本人研究者へ目を移すと、近年の印刷史研究は、これまであまり用いられなかった宣教師の記録——宣教師が出版した定期刊行物、本国に送った報告書・書簡、伝道活動を記録出版した書物等——から宣教師やミッション・プレスの活動を再検討するようになり、研究の新しい可能性と方向性が示されている。鈴木広光「中国プロテスタント活版印刷史料訳稿」上・下は、*Chinese Repository*に掲載された漢字の金属活字製作に関する記事を訳出したもので、各記事には簡単な解説と訳注が付されており、前掲論文「ヨーロッパ人による漢字活字の開発」とともにプロテスタント宣教師の漢字活字製作過程の詳細に迫るものである。

鈴木氏以外の研究は、美華書館に関するものが多い。それは、日本活版印刷業の祖と称される本木昌造が、美華書館の責任者ウィリアム・ギャンブル（William Gamble）を長崎に招聘して印刷技術を学んだことから、「どのような技術が美華書館（またはウィリアム・ギャンブル）から本木昌造に伝えられたのか」というテーマが、日本の印刷史研究の大きな関心となつていからである。また美華書館は、日本で伝道活動を行っていた宣教師からの印刷依頼にも応じており、ヘボン（J. C. Hepburn）『和英語林集成』、ブラウン（S. R. Brown）『日英会話篇』が印刷された印刷所でもあり、在華ミッション・プレスの中では日本との関わりが最も深い印刷所といえる。

美華書館とギャンブルに関しては、小宮山博史氏の研究が挙げられる。小宮山氏は、出版物・活字見本帳・漢字活字等の比較から、日本における最初の活字サイズは美華書館の活字サイズと同じであると示し、鯨尺をもとに本木昌造が作ったというこれまでの一般的な認識を改めた。美華書館に関する小宮山氏の研究成果は、「活字書体——中国からの導入と改刻」にまとめられている。

また後藤吉郎・横溝健志両氏は一九九九年に行った米国フィラデルフィアの長老派歴史協会（The Presbyterian Historical Society）での三日間の史料調査の成果を『デザイン学研究』に掲載している。協会所蔵の書簡から、本木

昌造が美華書館の印刷機と設備を購入するために四〇〇〇ドルの支払いを約束していたこと、ギャンブルが本木に技術講習を行う直前に美華書館を辞職している原因は、同じ長老会派宣教師のファーンハム (J. M. Farnham) との対立であったこと等を明らかにし、ギャンブルが長崎で本木に技術指導を行えたのは、ギャンブルの辞職時期と本木の招聘時期が偶然一致したためであるとしている。

以上のことからまとめると、日本におけるミッション・プレスに関する研究は、日本の活版印刷史研究と密接な関わりを持ち、前述した中国・台湾の研究者の研究は、キリスト教伝道史とも関連付けながら宣教師の出版活動を考察している。しかしどちらにしてもまだ個別研究が開始された段階で、全体を総合的に考察できるまでには至っていない。幸いなことにプロテストスタント宣教師の活動記録は、各派の本部や史料館に保存されている場合が少なくない。これらの史料を利用した研究を今後も継続し、成果を蓄積していかなければならない。

二 上海美華書館の所在地

(一) 美華書館はどこにあったのか

ここからは、美華書館(アメリカ長老会印刷所)について

て取り上げ、新史料に基づいて新たな知見を加えていきたい。

美華書館は一八四四年、華英校書房という名称で澳門に開設された。翌年の一八四五年に寧波に移転、名称を華花聖經書房¹⁰⁾とし、その後一八六〇年に上海へ移転して美華書館という名称になった。美華書館に関する基本文献は、美華書館の責任者であったギルバート・マッキントッシュ (Gilbert McIntosh) がまとめた以下の三冊である。

- (1) *The Mission Press in China: Being a Jubilee Retrospect of the American Presbyterian Mission Press, with Sketches of Other Mission Presses in China, as well as Accounts of the Bible and Tract Societies at Work in China*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1895. (以下『五十年史』とす)
- (2) *A Mission Press Sexagenary: Giving a Brief Sketch of Sixty Years of the American Presbyterian Mission Press, Shanghai, China, 1844-1904*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1904. (以下『六十年史』とす)
- (3) *Septuagenary of the Presbyterian Mission Press, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1914*. (以下『七十年史』とす)

(1)(2)(3)はそれぞれ、印刷所の五十年、六十年、七十年を記念して編纂された、今でいうところの社史や記念誌に当

たるものである。美華書館の歴史と活動を中心に、他のミッシオン・プレスや聖書協会の活動についても紙幅が割かれ、当時のプロテスタントミッシオンの出版活動を概観できる。

上海移転後の美華書館は四つの地点で活動していたことがわかってはいるが、これら三冊の史料に所在地（住所）への言及は少なく、文献や当時を知る人の回想にも異同がある。先行研究に基づいて所在地の変遷を簡単にまとめると以下ようになる。

一八六〇年 上海移転当時の場所は不明（「南門外」、

「虹口」という説もあり）

一八六二年 小東門外十六舖に移転¹²⁾

一八七五年 北京路十八号に移転（「北京路清遠里口第十五号」という説もあり）

一九〇二〜三年 北四川路一三五号に新工場建設（北京路十八号も継続して使用）

一九三一年 閉鎖

しかしこれらの住所が特定されても、それが上海のどの地点であるかを特定したことにはならない。番地が示す場所は時代によって変わっている可能性があり、地点の特定は当時の地図を用いる必要がある。そこで次項からは地図資料も用いて上海における美華書館の所在地を検討していきたい。

(二) 虹口から小東門外へ

前掲書『五十年史』には上海移転後の美華書館の場所について「ミッシオンハウスに隣接する小さい建物」という記述があるだけである。小宮山前掲論文¹³⁾では、一八六〇年から六二年までの二年間の場所に関して、『上海掌故辞典』等に「南門外」とあり、川田久長氏の論考や『上海出版志』には「虹口（ホンキウ）」とあることに触れながらも、これらの記述の根拠が不明であることから断定を避け、一八六〇年〜一八六二年までの場所は「不明」としている。

しかし今回、「虹口説」を裏付ける史料を紹介する。*Jubilee Papers of the Central China Presbyterian Mission 1844-1894, Comprising Historical sketches of the mission stations at Ningpo, Shanghai, Hangchow, Soochow and Nanking, with a Sketch of the Presbyterian Mission Press* ¹⁴⁾である。これはタイトルの通り、一八四四年から一八九四年まで、五十年間の寧波・上海・杭州・蘇州・南京での長老会の活動と印刷所についての記録である。ここに、上海移転直後の印刷所は虹口に置かれたとの記述があった¹⁵⁾。

一八六一年、ウィリアム・キャンブルがミッシオン・プレスとともに寧波から来て我々のミッシオンに合流した¹⁶⁾。印刷所は、はじめ一時的に虹口のカルバートソ

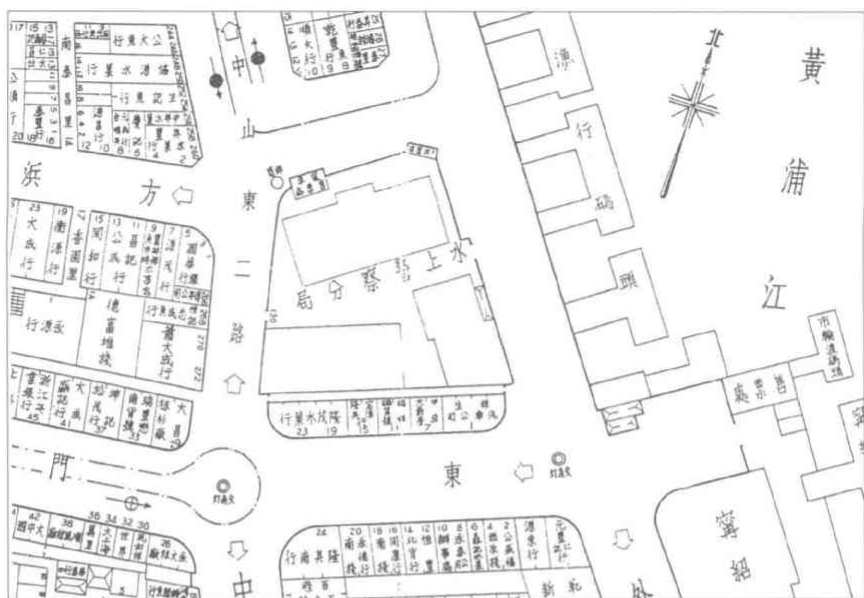


図1 「老上海百業指南：道路機構廠商住宅分布図」（部分）

〔上海市行号路図録〕の復刻。上海社会科学院出版社、2004年、36頁、第13図）

ンの家に隣接するいくつかの中国風の建物に置かれた。カルバートソン (M. S. Culbertson) は長老会の宣教師で、一八五〇年から上海で翻訳委員会 (Translating Committee) の仕事を任されていた人物であるが、彼の家が虹口のどこにあったのかまでは書かれていない。しかし、「虹口」とあるこの史料により、上海移転直後の印刷所は虹口に置かれたと考えて良いのではないだろうか。

上海移転直後の場所に加え、この史料には一八六二年の移転についても記述がある。

「上海県城の」東の周辺部、小東門から China Merchants' wharf の北端まで、町から川までが焼けた。カルバートソンの家は売られ、焼けた地区、現在フランス巡捕房が建っている場所を含む、川岸から水路沿いに小東門まで広がる土地の一区画を購入した。川に面して向かい側にカルバートソンの家が建てられ、水路の北側に沿って街の方へ印刷所の建物、西の端にチャペル、その向こう側の空間は監督者のための場所である。これらの建物は計画的に建てられ、印刷所の全ての部門の仕事にすばらしく適合した。

「小東門から川まで焼けた」というのは太平天国の乱によるものだろう。一八六二年に印刷所が小東門外に移転したと、印刷所がフランス巡捕房付近にあったことなどは、これまでも指摘されてきたが、この史料には、位置関係の説明が含まれている。小宮山前掲論文²⁰では、フランス巡捕房のあった場所はその後水上警察になったことから、『上海市行号路図録²¹』の地図を用いて、「この台形の中洲状の土地に水上警察分局と建物名が明記されていない大型の二棟（中略）がある。旧美華書館の建物はこの大型二棟のうち東側の建物」と推測している（図一）。

確かに地図には、比較的大きな台形の区画に建物が三棟、小路を挟んで南に小さな区画が描かれている。小路は水路を埋め立てたものだろうか。そうなると「水路の北側に沿って街の方へ」という表現によれば、この地図に描かれている建物が当時と同じであれば、東南の建物はカルパートソンの家で、その西側の建物が美華書館ということになる。しかしカルパートソンの家にしては東南の建物は大きすぎるようにも思われるし、カルパートソンの家や美華書館の建物が、この地図の作成時にはすでに建て替えられている可能性もあるので、さらに古い地図を確認する必要がある。

(三) 北京路清遠里口

次に、小東門外から移転した北京路の場所について検討したい。移転の年である一八七五年末に出された報告書がある。*Annual Report of the Presbyterian Mission Press at Shanghai for the Year Ending December 31, 1875*（以下『年報一八七五』とする）という史料である。これには、小東門外から北京路に移転するまでのいきさつが述べられている。

一八七二年の春、印刷所で使う新しい建物を建てるために、四〇二〇ドルで土地を買った。事情が変わりその計画は実行できなくなり、一八七五年六月一日、Chinese Polytechnic Society に六一二二・四二ドルで売却した。チャペル・住居も含め小東門で印刷所が使用していた不動産も六月に二〇二六〇・五五ドルで売却したが、ほぼ同じ頃イギリス租界の地所を印刷所が使うために一八〇三九・九六ドルで購入した。

これによると、小東門外の不動産は一八七五年に売却されたようである。そして新たに購入したイギリス租界への「移転は九月」で、「商業の中心地にとても近く」、「気持ちの良い健康的な町の一角にある」ことなども記されている。

この時の移転先が「北京路十八号」とされているのは、『五十年史』に「18 Peking Road」と記されていることによ



図2 「Plan of the English Settlement at Shanghai」(上海英租界図、部分) 1866年
 (『老上海地図』上海画報出版社、2001年、38頁) 147と書き込まれた場所の
 建物の形が見取り図と同じ。

る。しかし『万国公報』には「北京路清遠里口第十五号」とあることなどから、小宮山前掲論文²⁴⁾でも断定は避け、『老上海地図』の「Plan of the English Settlement at Shanghai」(上海英租界図、一八六六年刊)(図2)を使い、地図上に15、18という数字が書かれた場所が含まれる、西側を上円明園路、東側を下円明園路に挟まれた一帯に美華書館はあったのではないかと推測している。

筆者は『万国公報』以外にも、美華書館関係者であるホルト(W.S.Holt)が一八七八年七月二日付で上海から出した手紙のレターヘッドに「15 Peking Road」と入っていることを確認しており、十五と十八の二つの番地が確認できる理由はわからないが、印刷所の建物があった場所は小宮山氏が推測した通り、上円明園路と下円明園路に挟まれた一帯であろうと考えていた。

しかし、上円明園路より西に美華書館が書き込まれている地図が存在した。樽本照雄氏が『初期商務印書館研究 増補版』²⁵⁾の中で、一時期美華書館の隣で営業していた商務印書館の場所を示すために、美華書館が書き込まれている地図「重修上海县城厢租界地理全図」(一八九三年)を紹介している。また、この地図の増補版と思われる地図「新增重修上



図3 「新增重修上海县城廂租界地理全図」(部分) 1895年
(岐阜県図書館世界分布図センター所蔵)

海县城廂租界地理全図」(一八九五年)が岐阜県図書館世界分布図センターに所蔵されており、この地図にも、樽本氏が挙げた地図と同じ場所に美華書館の建物が記入されている(図3)。これら二枚の地図に示される美華書館の位置は、『万国公報』に書かれていた「清遠里口」(「口」は路地の入り口)に当たる。

加えて『年報一八七五』には、北京路の建物内部の見取り図が掲載されており(図4)、建物については、以下のように記述されている。

本館は全長八九フィート、奥行き四七フィートで三階建て。建物の右側は後方へ四七フィートのウイングが延びている。本館のすぐ後ろは、幅一二フィートの通路で隔てて、七二×四六フィートの二階建ての建物がある。ビルは十二年前に商人の家として建てられたもので、美華書館が使うに当たっては大規模な改装を行い、本館は南向きで道路から八〇フィート後ろに建っている。前方には広い土地がある。右側は広く舗装された路が蘇州河まで延びており——一五〇ヤード——重いものはそこで陸揚げされる。

この『年報一八七五』掲載の見取り図(図4)は

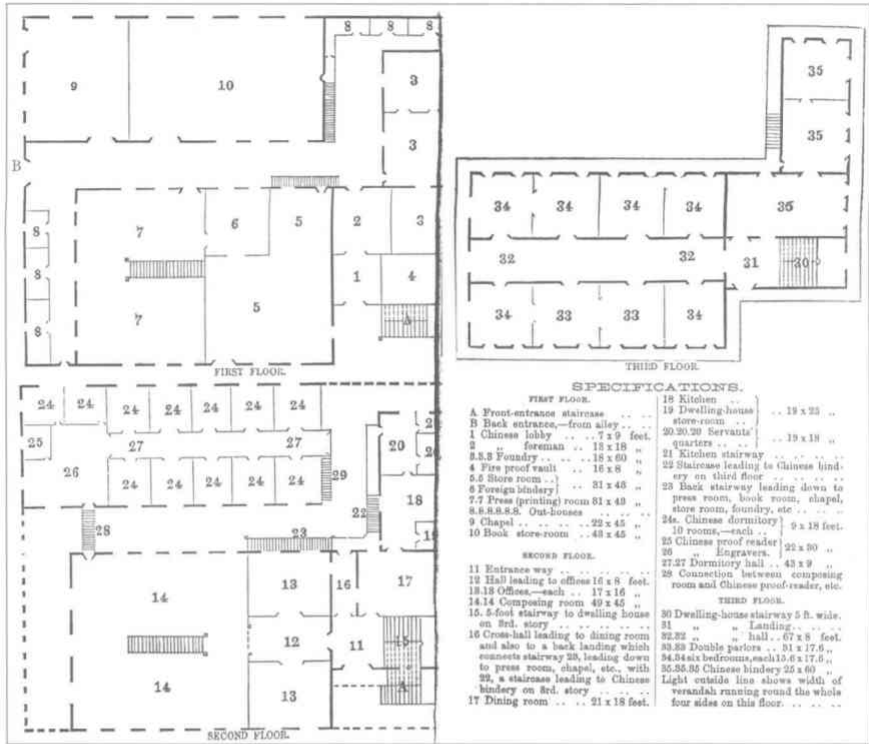


図4 北京路の建物の見取り図（見開き部分が切れて複写されている）

(Annual Report of the Presbyterian Mission Press, at Shanghai, for the Year Ending December 31, 1875, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1875, pp. 10-11)

美華書館の位置に関して、興味深い示唆を与えてくれた。先ほど紹介した、図3「新增重修上海真城廂租界地理全図」等で美華書館と書かれている場所を、図2「Plan of the English Settlement at Shanghai」を確認すると、東西を江西路と河南路に挟まれた147と番号が振られている場所に、北京路から後退した場所に建っている建物がある。この建物の形が見取り図（図4）に描かれている建物の形と同じような形をしているのだ。「メインビルは南向きで道路から八〇フィート後ろ」という説明とも一致する。図2は一八六六年刊であるが、美華書館は一八七五年に「十二年前に商人の家として建てられた」建物に移転したので、一八六六年刊の地図に建物が描かれていても不思議ではない。美華書館は「清遠里口」にあるこの建物に移転したのではないか。また、『七十年史』に掲載されている北京路のLowrie Memorial Churchの写真（図5）には、教会の右側にゲ

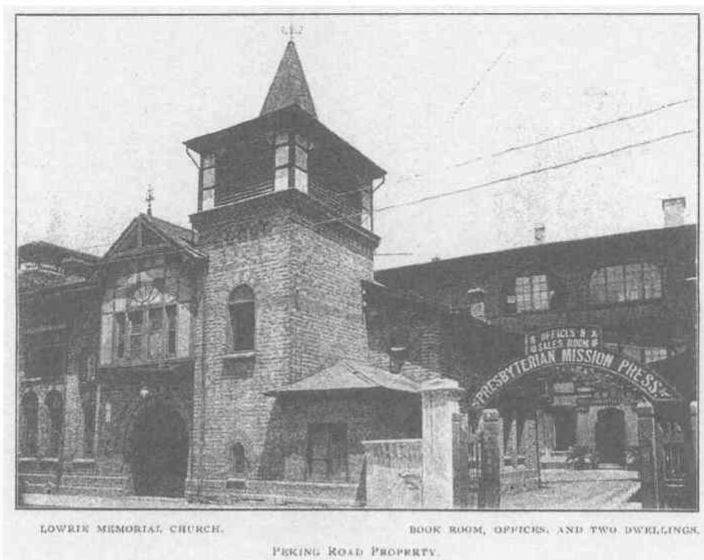


図5 *Septuagenary of the Presbyterian Mission Press* 取載の写真。手前が Lowrie Memorial Church、奥の建物が印刷所。

ト、その奥に小さく印刷所の建物が写っており、建物と北京路の間のスペースにはその後、Lowrie Memorial Church が建設されたように見受けられる。

ただそうなると(図2) [Plan of the English Settlement at Shanghai] に147と振られている番号は「[15 Peking Road] という住居表示に用いられる番地とは別の番号なのか、[15 Peking Road] と「[18 Peking Road] という二つの番地が存在するのはなぜなのか」という疑問が残る。しかし、美華書館のあった北京路の建物は、上円明園路と下円明園路に挟まれた場所ではなく、清遠里口にあったと考えて良いのではないだろうか。

むすびにかえて

以上、新出史料をもとに、美華書館の上海移転当初の場所が虹口であること、北京路の建物は清遠里口にあったのではないかということ述べてきた。ただし未見の地図や史料による補完の必要は感じており、今回は取り上げなかった北四川路の所在地も地図で確認していきたい。

最後につけ加えなければならないことは、本稿では、印刷史研究の視点から宣教師の出版活動に関する研究を紹介したため、キリスト教史研究者の業績については触れていない。ここでそれらについて詳しく言及することは難しい

が、例えば宣教師が出版した書籍については吉田寅氏による研究があり、都田恒太郎氏の著書の中でも度々、宣教師の出版活動が紹介されている。また、ヘボンとは「和英語林集成」印刷のために美華書館に滞在しており、ヘボンの書簡にも美華書館に関する記述がある。一見、印刷史とキリスト教伝道史は関係がないように思われるかもしれないが、殊に近代においては密接な関係があり、双方の研究成果の進捗が、やがては東アジアにおける総合的な印刷・出版文化史研究へと結びつくはずである。

注

- 〔1〕 印刷史研究会編『本と活字の歴史事典』柏書房、二〇〇〇年、一三九―二二二頁。
- 〔2〕 葉再生「現代印刷出版技術の伝入と早期的基督教出版社」『出版史料』一九九〇年第一期、上海書店、一九九〇年、九九―一〇頁。
- 〔3〕 範慕韓主編『中国印刷近代史 初稿』第三章 近代印刷術の伝入と発展 印刷工業出版社、一九九五年、六一―一九三頁。
- 〔4〕 何凱立著、陳建明・王再興訳『基督教在華出版事業（一九二一―一九四九）』四川大学出版社、二〇〇四年。著者による序文によると、この研究は香港中国基督教研究中心（Chinese Church Research Centre）于一九八八年に出版された *Protestant Missionary Publications in Modern China 1912-1949: A Study of Their Programs Operations and Trends* の中国語版であるという。何氏は米國留学中、近代在華宣教師の出版事業を研究テーマとしていたが、現在はこの研究からは離れているとのことである。
- 〔5〕 蘇精『馬禮遜与中文印刷出版』台湾学生書局、二〇〇〇年。
- 〔6〕 鈴木広光「中国プロテスタント活版印刷史料訳稿」上・下、『印刷史研究』第二号一―一八頁、第三号一―二九頁。
- 〔7〕 ウィリアム・ガンブルと表記されることも多い。
- 〔8〕 小宮山博史「活字書体——中国からの導入と改刻」『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』NPO法人近代印刷活字文化保存会、二〇〇三年、三三四―三七一頁。
- 〔9〕 後藤吉郎・横溝健志「近代活版印刷を我が国に紹介したW・ガンブル氏の来日に至る背景についての調査研究」『デザイン学研究』第四九号、二〇〇二年、二八四―二八五頁。
- 〔10〕 寧波での名称は「五十年史」の文中に花華聖經書房と表記されている。しかし出版した書籍の奥付が華花聖經書房であることから、華花聖經書房とする説が有力である。
- 〔11〕 美華書館の所在地に関する諸説を紹介・検討した先行研究に、小宮山博史「上海美華書館」『ジ・アザー 阿佐ヶ谷美術専門学校研究・教育情報誌』第四号、二〇〇二年、九五―一〇三頁がある。

- 〈12〉 小東門というのは、上海皇城（城壁に囲まれた市街）の城門の一つ。美華書館の編纂した史料では印刷所の場所を Little East Gate と表記しているが、実際に美華書館があったと思われるのは、小東門を出て少し直進した（十六舗と呼ばれていた）地域なので「小東門外」または「小東門外十六舗」というほうが正確である。
- 〈13〉 小宮山前掲論文「上海美華書館」九六頁。
- 〈14〉 *Jubilee Papers of the Central China Presbyterian Mission 1844-1894, Comprising Historical Sketches of the Mission Stations at Ningpo, Shanghai, Hangchow, Soochow and Nanking, with a Sketch of the Presbyterian Mission Press, Shanghai*: Presbyterian Mission Press, 1896.
- 〈15〉 *Ibid.*, p. 59. 本稿での史料の引用はすべて、筆者による和訳である。
- 〈16〉 『五〇年史』『六十年史』には、上海移転は「一八六〇年十二月」とある。
- 〈17〉 Presbyterian Mission Press [1896], *op. cit.*, pp. 37-38.
- 〈18〉 *Ibid.*, p. 60.
- 〈19〉 原文では French police station。巡捕房とは、外国租界の警察署のことである。
- 〈20〉 小宮山前掲論文「上海美華書館」一〇〇頁。
- 〈21〉 『上海市行号路図録』上海福利営業、上冊一九四七年、下冊一九四九年。
- 〈22〉 *Annual Report of the Presbyterian Mission Press, at Shanghai, for the Year Ending December 31, 1875*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1875.
- 〈23〉 *Ibid.*, p. 6.
- 〈24〉 小宮山前掲論文「上海美華書館」九七頁。
- 〈25〉 『老上海地図』上海画報出版社、二〇〇一年、三八頁。
- 〈26〉 Presbyterian Church in the U.S.A.: Board of Foreign Missions, Correspondence and Reports, 1833-1911, Philadelphia, Presbyterian Historical Society.
- 〈27〉 樽本照雄「初期商務印書館研究 増補版」清末小説研究会、二〇〇四年。商務印書館の創設者、夏瑞芳・鮑咸恩・鮑咸昌・高鳳池らは長老教会が運営していた学校、清心書院で学んだり美華書館に勤務したりしており、商務印書館と美華書館は関係が深い。
- 〈28〉 Presbyterian Mission Press [1875], *op. cit.*, p. 7.